

## 学芸員の使命

—芸術を通して人間の創造力の豊かさを伝える—

今年是一段と夏の暑さの厳しかった北海道。そんな猛暑が収まってきた 2023 年 8 月末に、一人の人物を訪ねた。有島記念館（ニセコ町）の寺嶋弘道館長である。幅広い知識から語られる言葉には、現代の私たちに向けて豊かなメッセージがあった。

### 学芸員とは？

—学芸員という仕事について教えてください。

寺嶋「学芸員とは博物館や美術館、動物園などに配置される専門職員。英語だとキュレーターって言うけれど、海外ではプランナー（展示設計）やコンサベーター（作品保全）、ヒストリアン（歴史研究）、コーディネーター（渉外）、エディター（展示編集）、ミュージアムティーチャー（教育担当）といった専門職に分かれている。ところが、日本の博物館ではこれらの仕事を全部『学芸員』が引き受けている。だから**日本にしかない職業なんです。**

その基本は博物館資料、つまりモノを扱う仕事だけれど、人と接し人を理解していく中でモノの価値を見出していく仕事です。

学芸員になるためには、モノも扱えるし、対面的な仕事もできるし、学問領域の探求や執筆、そして展示センスもないとだめ。相当に困難な仕事です。さらに美術館の学芸員には審美眼も求められる。**学芸員という仕事は、そうしたさまざまな職務を統合したところで成り立っている。**日本の博物館はもっと分業を進める必要があると思います」

### 恥部を明らかにすることが学問か？

—学芸員として、寺嶋さんが目指してきたものを教えてください。

寺嶋「美術を語る時『人と芸術』という言葉がよく使われる。芸術は人によって生み出されるし、作者を理解することは作品を理解することにつながる。**だから、芸術には人が介在していることをまず伝えなくてはならない。**

『どうして学芸員は、人生の恥部まで赤裸々にしたがるんだろう』と、ある絵描きさんから言われたことがある。『恋人は誰だっ



### 寺嶋弘道 館長

滝川市生まれ。金沢美術工芸大学で彫刻を学んだ後、学芸員に。道立三岸好太郎美術館、道立近代美術館、帯広美術館、道立文学館、釧路芸術館などに勤務。道立近代美術館の学芸副館長、本郷新記念札幌彫刻美術館館長を経て 2021 年から有島記念館館長。

たとか、家族といつ死に別れたとか、そんな心の痛みまでなぜ話さなくちゃいけないの』って。

人がどういう生き方をしたかということは、人の歴史を語る上で大事なこと。だから、そのこと自体を私は否定しない。けれど、芸術作品は作者のことを知らなくても鑑賞できるし、ただそこにあるだけで広く深い美の世界を有している。見る人を引き付けてやまない。つまり、作品の芸術性は作者と結び付きつつ別な次元で自律しているんです。

ところが、人間は物事を理解するところまではできても、納得したり同調したり実践できるかは別。芸術を見て楽しんだり、個性的な表現に出会ったりして、我々が受け止めなければならないものは何か。答えの**見えない美の迷宮をさまよいながら、鑑賞者自身が自分を見つめる場所、それが美術館**だと思っています。『美は普遍的なものだ』という価値観さえ疑ってかからないといけないかもしれない。歴史や文化は奥深い。追究しても追究しても、出口にはたどり着けない」

### 西洋美術がつくりあげてしまったもの

—今日の美術館に対して何か感じることはありますか。

寺嶋「私が学芸員になった半世紀前、全国の博物館では教育普及活動に力を入れ始めた。当時10歳だった子どもたちはいま60歳。では、博物館のファンや美術好きがどれだけ増えただろうか。美術を学び伝える活動を積み重ねてきたはずなのに、そんなに増

えてないんじゃないかな。なぜだろう。私には基本的なアプローチに対する反省があって、この社会は肝心のところに到達していない。

つまり、美術作品を観たり、学んだりすることは伝えてきたけれど、作品をもっと身近において、生活や暮らしの中で日常的に触れたり味わったりするという美的体験本来のありようを、美術館は教えてこなかったんじゃないかな。

音楽は現代の多様なニーズに応じている。でも、美術は未だに『これが名作、これが重要だ』と言って、国民のさまざまな関心や興味や価値観に対応していない。美の規範が従前からのヨーロッパの美術に基づいたままなんです。1点の名作も大事だけれど、**身近な1点を愛でることにはもっと意味がある**」

—ここで突然、寺嶋さんがインタビュアーの私たちに向けてこう投げかけられた。

寺嶋「手元の紙にまず円を描き、次にそれが『球』に見えるように描いてみて」  
結果はその場にいた5名のうち4名が陰影法で、1名が幾何学を使って球を描いた。

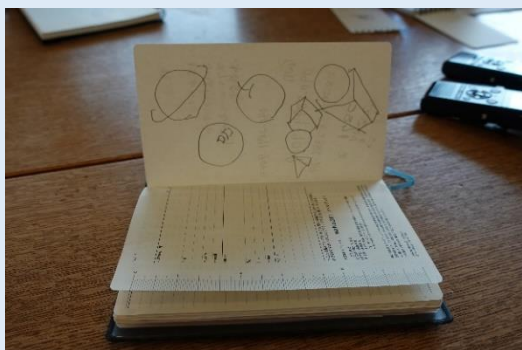
寺嶋「球を描くのいろいろな方法があるということに気付けるのが美術史。それなのに日本人は、今から150年前に導入された明暗法(陰影法)を使って、7割くらいの人が影をつける。それくらい、我々には西洋美術が擦り込まれている。

日本人の頭が凝り固まっていることに加担してるのが、日本の美術館。ヨーロッパのルネサンス以降の美術を良しとして、日本中に西洋美術を伝えた。だけど、今の美術の

状況は、マンガやアニメ、ファッション、デザインなど、かつてはサブカルチャーと呼ばれた分野に人々の関心が向いている。

ニューヨーク近代美術館は携帯電話やゲームを作品として収集している。そういう時代に何を集め見せていけばいいのか。そういう視点に欠けていることが、日本の美術館の大きな問題だと思います。

国民や大衆と美術との『接着点』を美術館が果たすとすれば、よくよく考えていかねばならないですね。浮世絵がその最も良い例。戦前はもちろん、戦後もしばらく浮世絵は芸術として認められてこなかった。それが関係者の熱意とたゆまぬ努力によって美術の仲間入りを果たした。今や日本人の画家として一番知られているのは、葛飾北斎ですからね」



寺嶋さんが描かれた「球」。  
円に線を書き加えて土星やリングにしたり、立方体や三角錐と並べて描いたりして、いとも簡単に「球」を表現されていた。

寺嶋「今日の社会を文化や芸術から見ていれないといけない。一方で、作品や作家の研究も進めないと、その芸術性を裏付けることはできない。日本人の明暗法に取り憑か

れているこの状況をなんとかしないと…。西洋美術に価値があるのは間違いないけれど、それ以外の価値もあるはずだから。

アーティストが世の中で活躍するのは、もちろん美を表現するっていうこともあるけれど、いま話したような**発想の転換**というか、**表現の自由に基づく「新しい価値」を示してくれること。それに気付ける人が芸術家や専門家や愛好者。そういう人が一般の会社や組織にとっても、新しく物事を動かしていく力、イノベーションの力になる」**

### 「ソウゾウリョク」

—美術で大事なことは何ですか？

寺嶋「美術って『ソウゾウリョク』が必要です。これが一番大事。どういう漢字を思い浮かべましたか？

日本語で『ソウゾウリョク』っていうと、クリエイイトする力（創造）と、イメージする力（想像）の二つの言葉がある。なので誤解を生んだり、話が噛み合わない原因になったりするんだけど、どちらも美術や芸術に関わる言葉だからとても大事です。

何もないところから何かを創ることも、頭の中で思い描くことも、両方とも人間にしかできない営み。**そしてそれは鍛えないと衰える。**だから美術をもっと多くの人に知ってほしいなと思います。鍛えるって言っても、筋肉と違って、もっと柔軟なもの。筋肉も裏切らないけど、我々の感性も裏切らないから…」

## 人間は多面体

—寺嶋さんはこれまで美術館と文学館の両方に勤めてこられました。ご自身の専門外である文学館に勤務することに関して葛藤はありましたか。

寺嶋「美術館にこだわる必要はあまりないのかも。明治の人はファインアートという言葉で『美術』という二文字を充てたけど、初めは『美術』の中に音楽も文学も含まれていた。それが視覚芸術を指すことになったのは後の時代になってから。

だから、美術を矮小化して考える必要はそもそもないのかもしれない。学問が細分化されていくのは当然としても、全体を見渡さないと歪んでしまう。

そもそも人間っていろいろな能力をもっていて『多面的』なもの。今の若い人は、自分の個性を表現したり、アイデンティティを見つけて表したり、自分にレッテルとか色をつけて、早く自己を主張しなくてはいけない人っているかもしれない。

しかし、そんなに焦ることはない。人間って多面体。自分の色は自ずと出てくるもので、周りからピンクに見られているなら、それはそれでOK。でも、ピンクと桃色は違うし、短所と長所は表裏一体と考えて、自分でピンクって決める必要はないんじゃないの。

美術作品を作者の個性で判定する。それは、まさに近代ヨーロッパの視点。人間って、もっとドロドロしていて、アメーバのような不定形というか、流動しているもの。それを一言で言えば『自由』と言うのかもしれないけれど。だから『得体の知れないもの』って考えるほうが、自分を拘束しなくていいんじゃないかな」

—自分を拘束しないというのは、美術や文学でも「こうあるべきだ」と考えなくてもよいということですか？

寺嶋「そうだと思いますよ。球体表現と同じで既成概念に縛られる必要はない。『こうあるべきだ』ということの多くが西欧アカデミズムだから」

## 有島記念館



『一房の葡萄』『生れ出づる悩み』など数多くの小説で知られる大正期を代表する作家、有島武郎。近代北海道美術の父とも呼ばれる彼の生涯を顕彰する記念館。

さらに、ニセコ町唯一の博物館として、地域の文化や芸術を展示・発信する役割も担う。

コーヒーを味わいながら読書を楽しむ開放的なブックカフェも併設。

前庭からは雄大な羊蹄山を一望できる。

(北海道大学教育学院 浅利百合子)